

大生産県の1/20～1/100の生産量の府県産のものが、銘柄品の支配する市場に割って入っていることを知り、驚きとともに認識を新たにしました。

いろいろ話を聞きますと、寺田いもは市場に出荷されるものはほとんどなく、生産農家の自家用として、また周辺の消費者に直接販売したり、あるいは観光いも掘り園を営んだりして消費され、一般の人、とくに突然訪れる「よそ者」の目にはほとんど触れることはないようです。

☆観光農園の目玉として

市の西側を流れる木津川に沿った砂質土の地区にさつまいもの畑が散在し、観光いも掘り農園が開かれています。9月中旬から10月いっぱいがいも掘りのシーズンで、京都・奈良あるいはさらに遠方からの来園者が多く、とくに休日は賑わうとのことでした。もうシーズンの盛りを過ぎてはいましたが、幸いにし

て数株の収穫ができ、ずっしりと重く鮮やかな紅色の寺田いもを手にすることができました。

この地にさつまいもが導入されたのは古く、享保元年（1716）島利兵衛が琉球からさつまいもの苗を秘かに持ち帰り、寺田の地（現城陽市の一部）で栽培に成功したといわれています。青木昆陽が薩摩から種いもを入れて小石川養生所（現植物園）に植え、また下総・上総両国に伝えたのが享保20年（1735）ですから、実に20年近くも前にすでに山城国に入っていたのです。

江戸時代にたびたび起った飢きんのときには多くの命を助け、救荒作物としての価値が認められ、またこの地がさつまいも栽培に適していたこともあって急速にひろまり、ここで採りたいもが味がたいへんよく栗よりもおいしいと称讃され、名産・特産物としての名をひろめていったといえましょう。市内の大蓮寺にはさつまいもを型どった島利兵衛の墓

ジャガイモは野菜か

かつてアメリカで、トマトは野菜か果物なのか、と論争、いや裁判沙汰になったことがあったそうです。植物学者は果物派、農務省は野菜派として争ったが、結論は「トマト＝野菜説」に軍配がかりました。その理由は、裁判所によりますと、「トマトは食事中に食べられるが、デザートとしては使われない。したがってトマトは野菜である」というものでした。

「野菜」とは、『大辞林』によりますと、「食用に育てた植物」となっています。この定義では、かなりの植物が野菜の仲間になります。リンゴ、カキ、バナナも食用として栽培することが多いので果物ではなく野菜になります。ジャガイモはもちろん、穀類の米・麦まで入ってもおかしくありません。イチゴは食用に育てますが、果物屋さんで売っているので迷いますね。

ジャガイモは、外国のレストランのメニューには、「Vegetable & potato」とふたつに区別し、ジャガイモは野菜には入らず独立させていて混乱しそうです。そこで何かないかと調べてみますと、ノンフィクション作家の村野雅義さんの本では、辞書の定義にもう少し補足的制限を加えています（『狂ってしまった野菜たち』）。

① それだけを食べて、お腹を満腹にするものではない。

② ビタミンやミネラルの摂取ということが、おもな目的である。

③ 「草」でできているもの。

これによりますと、果物屋で買ってくるメロン、スイカは野菜ですが、カロリーの多い主食の米麦は除かれています。ジャガイモはカロリーが御飯の半分でビタミン類が豊富なので野菜になります。あなたならどう裁きますか。

〈ホクレン主任技師 浅間和夫〉